

ひろはた あ ばらしんでん ま し たま るやま  
広畠・阿原神田・間下丸山遺跡  
発掘調査報告書

平成 6 年度 檻垣外遺跡ほか発掘調査報告書



長野県岡谷市教育委員会

## 序

岡谷市内には190箇所を越える縄文、弥生、奈良、平安時代等の遺跡が発見されておりますが、住宅建設などに伴う遺跡内での土木工事は本年も数多く申請され、これらにつきましては試掘調査などの対応を行い、調査件数は21件にのぼりました。

今年度の調査では、広畠遺跡から縄文時代中期の住居跡1棟が発見され、阿原神田遺跡からは弥生時代中期前葉の土器片が数多く出土し、間下丸山遺跡においては縄文時代中期住居跡3棟が発見されるなど、貴重な埋蔵文化財が発見されました。

本来、埋蔵文化財は祖先の残してくれた私たちの共有の遺産であります。このような貴重な文化遺産を調査し、出土遺物を整理、観察することによって、原始・古代の岡谷の人々の歴史と文化をより一層明確にすることができるでしょう。

今年度も多くの個人住宅建設などの小規模開発が行われました。このような狭い面積の開発であっても調査を継続させ、資料を蓄積することにより、いずれ遺跡全体の様子を窺い知ることができるような成果に繋がる事と思います。

今後、この報告書が学術文化の向上に活用されることを願っております。

今年度の調査にあたり、土地所有者各位、工事関係者の方々、そして調査地に隣接した多くの皆様のご好意、ご協力にお礼申し上げます。また、発掘調査に携わっていただいた皆さんには、災暑、嚴寒の中を御苦労いただき感謝申し上げます。

平成7年3月22日

岡谷市教育委員会

教育長 斎藤 保人

## 例　言

1. 本報告書は、平成6年度櫻垣外遺跡ほか岡谷市内遺跡発掘調査及び試掘・確認発掘調査の報告書である。
2. 調査は、国および県から補助金交付を受けた岡谷市教育委員会が、平成6年4月11日から平成7年3月22日にかけて実施した。報告書作成作業は主に12月～3月に行った。
3. 出土遺物、記録図面、写真等の資料はすべて岡谷市教育委員会が保管している。
4. 本報告書中の原稿執筆は広畠遺跡、阿原神田遺跡を小坂英文が、間下丸山遺跡、下り林遺跡を林賢が担当し全体の編集、作図は事務局で行った。
5. 出土遺物の整理等にあたっては以下のようない方法と約束に留意して作業を進め、図版中の遺物に対する記載はこれに準じた。土器・石器のすべてに遺跡No・調査年次・グリッド名（トレーニング）・遺物No・遺構名・層位を記入している。

遺跡No・調査年次 23.9 広畠遺跡 第9次調査

139.2 阿原神田遺跡 第2次調査

83.1 間下丸山遺跡 第1次調査

遺構略号 住居跡 H

小竪穴 P 数字の後にP

柱穴 P 数字の前にP

層位（土層名）略号

遺構内 覆土上層（いわゆる逆三角堆土） フ上

覆土下層（いわゆる三角堆土） フ下

床面 床直

覆土 フ

炉内 F

柱穴内 P

遺構外 耕作土 コウ

褐色土 カツ

暗褐色土 アン

黒褐色土 クロカツ

黒色土 クロ

灰色粘土 灰粘

## 目　次

### 序

### 例言　目次

1. 平成6年度発掘調査及び試掘・確認調査の概要	1
2. 下り林遺跡	3
3. 広畠遺跡	5
4. 阿原神田遺跡	11
5. 間下丸山遺跡	20

## 1. 平成6年度発掘調査及び試掘・確認発掘調査の概要

平成6年度、岡谷市内において周知の遺跡に農地転用、公共事業等の開発行為が計画・実施され、市教育委員会が何らかの対応を実施した件数は25件をこえ、そのうち試掘・確認発掘調査は21件に及んでいる。そしてそれからさらには発掘調査に及んだものは3件3遺跡である。

本年度の調査の特徴は、これまで調査が比較的多く行われた長地方面の平坦部（湖北地区沖積地）の調査が減少し、市街地から山沿いや、貯留湖近くの低地へと開発が移行している様子が窺われる。そのため、これまで見例のなかった間下丸山遺跡において住居跡が発見された事や、阿原神田遺跡から多くの弥生時代中期前葉の破片が発見されるなど新たな成果が得られる結果となった。

広畑遺跡は、平成2年度に調査が行われた箇所の続で、地表より200cmを越える深さから住居跡が発見された。以前の調査成果と併せて考えると南向きの比較的急斜面な地形に密集して遺構があることがうかがわれる。

阿原神田遺跡は住居跡が発見されなかったものの、黒色土層からは弥生時代中期前葉の土器片がある範囲をもって集中的に出土した。横河川まで数十mという立地もあり、河川の水を利用することのできる地形や、時代的なことから、初期稻作の痕跡を知る手掛かりともなりそうな調査となった。

また、間下丸山遺跡は塩嶺から続く山ぎわにあるテラス状の浅丘に立地する。間下地区は古くから宅地となっており、本格的な発掘調査が行われたのは今回が初めてである。その結果、縄文時代中期中葉住居跡3棟が発見され、復原可能な土器が数個体出土した。しかも、その中には蛇を文様や把手のデザインとした豪華な飾りの付いた土器が出土し、市街地においても意外に遺構の保存状態のよい箇所が残っていることが判った。

今後も僅かな面積の農地転用であっても確実に調査を継続させることにより、これまでの調査で得られた成果をより一層充実させ、さらに広い遺構群全体を概観し遺跡の性格を確定することができるであろう。

なお、発掘調査については本文中にその内容を記したが、試掘調査によって遺構が発見されず発掘調査にいたらなかった箇所については、以下の表によることにして詳細は省略した。

また、本年度は川岸、今井、長地各地において表面採集による遺跡分布調査を行った。これにより新しく発見された遺跡は7件、範囲・位置の変更が確認された遺跡が18件あり遺跡地図改定の基礎資料となった。

遺跡名	所在地	調査の原因	調査期間	主な遺構	遺構・遺物の時代
1 上屋敷	長地字下屋敷5277-2外	住宅建設	4.11~4.18	小堅穴2	縄文・中世
2 阿原神田	南宮・丁目9757-20外	住宅建設	4.15~5.10	弥生	発掘調査
3 阿原神田	南宮一丁目9802-1外	住宅建設	4.15~5.10	弥生	
4 横垣外（焼跡）	長地字焼跡11-5外	住宅建設	4.25~4.27	平安	
5 阿原神田	南宮一丁目2063外	住宅建設	5.9~5.11	弥生	
6 神海塚	山下町一丁目14-24	工場建設	5.13~5.16	縄文・平安	
7 後田原	川岸西一丁目4322-1外	住宅建設	5.18~5.23	小堅穴11	縄文
8 広畑	川岸山神上1549-1	住宅建設	5.23~6.13	縄住1	縄文
9 間下丸山	山下町一丁目8-25	駐車場建設	6.27~7.25	縄住3 小堅穴16	縄文
10 砧平	長地5852-1	宅地造成	6.29~7.8	縄文	
11 遺跡分布調査	山内	分布調査	7.28~12.28	縄文	
12 横垣外（向田通）	長地字向田通4724-5	住宅建設	8.1~8.4	縄文・平安	
13 堂山	川岸東四丁目14-1511-1	擁壁工事	8.22~8.23	縄文	
14 神海塚	山下町一丁目2781-3外	葬送挖掘工事	9.14~9.30	縄1 平1 中1	縄文・平安・中世
15 下り林	滝の沢3080-5	宅地造成	10.7~3.20	縄住2 平1	縄文・平安
16 新井市	滝五丁目279-7外	住宅建設	10.25~10.26	縄文	
17 花洞城跡	滝一丁目3752-1外	境内整地	11.2~1.31	中世	
18 横垣外（向田）	長地字向田4719-1外	アパート敷地	1.20~1.30	縄文・平安	
19 牛平北	宇西山1723-18外	工業団地造成	1.30~2.17	縄文	
20 神海塚	山下町一丁目14-23	住宅建設	2.3~2.17	平安	
21 植松松田	種沢10086-1	車庫建設	2.9~2.14	縄文	

第1表 平成6年度試掘・確認調査一覧表



第1図 試験・確認発掘調査地点（番号は表1の一覧表に同じ）

## 2. 下り林遺跡

### 1. 調査の概要

発掘調査の地点	岡谷市滝の沢3080-5
発掘調査の期間	平成6年10月7日～平成7年3月20日
調査の目的・原因	住宅地造成
土地の所有者	岡谷経輝
発掘調査面積	157.1m <sup>2</sup>
発見された遺構	平安時代住居跡1棟 小竪穴1基 繩文時代住居跡2棟
出土した遺物	土器片170、打製石斧2、凹石5、磨石2、磨製石斧2、石錐3、石片1箱

### 2. 調査の経過

下り林遺跡が世に知られるようになったのは、大正12年八幡一郎氏が遺物を採集し諏訪史第1巻に記録されたのが最初である。戦後、昭和26年戸沢充則氏によって調査成果が報告され、下り林遺跡が繩文時代の早期末から前期初頭の遺跡として注目されるようになった。昭和43年には、岡谷市史編纂に伴う遺跡分布調査で2個体の早期末土器を発見、58年には中央道長野線の工事用道路拡幅に伴う調査で、平安期の遺構が発見され遺跡の範囲がより拡大することがわかった。

### 3. 遺跡の立地

この遺跡地は塩嶺山塊から派生する尾根が市街地に向かって急斜面で落ち込む先端部に立地する。そこは2つの尾根に分かれ、その間に東に向かって傾斜する沢筋が形成されている。かつて押型土器などが発見されたのはこの沢筋のくぼ地で、ここが遺跡とされていた。

今回の調査は、分布調査で想定した2つの尾根を含めた広い遺跡範囲について、これを確認するために行われた。即ち北尾根沿いに3カ所、沢筋に13カ所、南尾根に15カ所に試掘坑を設定し発掘した。調査の結果この地の基盤は塩嶺累層を形成する安山岩の地表直下までせり出している地点もあり、軽石層や灰色火山灰層が暗褐色土層下に見られ、暗褐色土層の下に厚い第二の黒色土層が介在するなど複雑な地質が形成されている。

### 4. 発見された遺構・遺物

遺物・遺構の遺存状態は、北尾根の南斜面に設定された試掘坑6・7・8・11・12区及び標高の高い地点に設定された14・21区からは遺物・遺構が検出されなかった。ほかの試掘坑からは数の差はあれ遺物・遺構が検出された。中でも北尾根では13区から小竪穴1基が検出された。この周辺には遺構群の存在が予想される。沢筋では2区で溝状遺構が、9区では平安期のカマドが、10区からは深さ2mほどの第二黒土層中より土器片が出土している。

南尾根では24区で鍋底状掘り込みが、16区で柱穴2カ所、20区では竪穴状の掘り込みの一部が発見された。

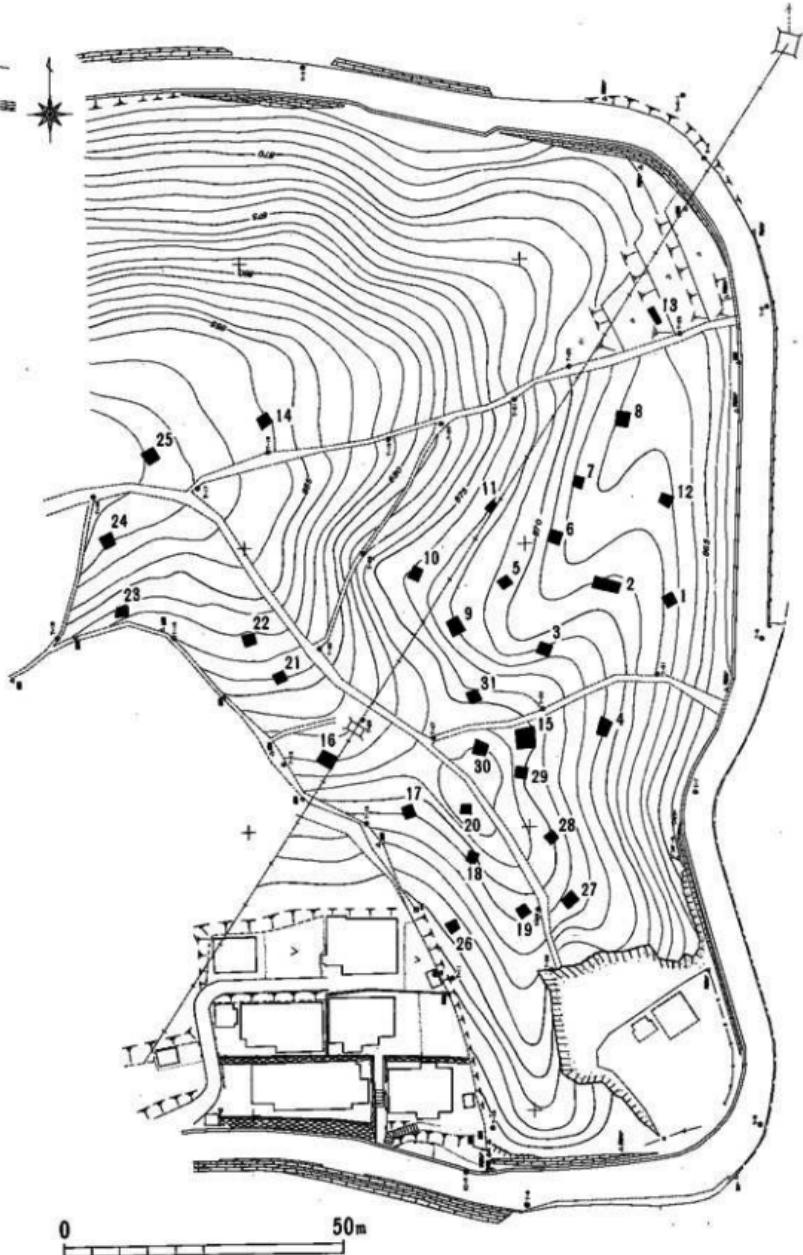
28区では細身の磨製石斧が1点出土、29区は鍋底形の石積遺構や黒耀石の集石が出土している。30区でも小竪穴1基が検出されている。15区では擾乱された灰色火山灰土層が見られるが、遺物が濃密に検出できた。

### 5. 調査のまとめ

今回の調査でいくつかの遺構の存在が確認できた。また遺物の出土も予想以上に広がり、そのために遺跡の範囲が拡大した。しかしその全体像は調査の性格上明らかにできなかった。遺物の分類は土師器を除いては先覚者の研究と照合し検討されなければならない部分があり、今後の課題として残ったが、平安期の遺構が今回の調査で南尾根の裾に点在することがわかった点は大きな成果であった。結果的には2haに及ぶ分布調査で遺跡範囲があらためて確認されることになる。

遺構の分布は濃密ではないが、2本の尾根筋を主に、拠点的に遺構群が点在し、その間の沢筋のくぼ地状の平坦部に遺物が散布することがわかった。繩文期と平安期は若干立地を異にする傾向も認められた。

下り林遺跡は、今後とも繩文時代早期文化の解明によって、また平安期の高地に占拠する集落の在り方を解明するためにも、大切にされなくてはならない遺跡であることがより明らかとなつた。



第2図 下り林道跡 トレチ位置図 (1 : 1000)

### 3. 広畠遺跡

#### 1. 調査の概要

発掘調査の地点	岡谷市川岸山神上1549-1
発掘調査の期間	平成6年5月23日～6月13日
調査の目的・原因	擁壁・住宅建設
土地の所有者	茂原 高氏
発掘調査面積	17.8m <sup>2</sup>
発見された遺構	縄文時代中期中葉住居跡1棟
出土した遺物	石錐3、石錐2、石匙2、打製石斧11、磨製石斧1、凹石5、敲き石2、玉石2、不定形石器2、縄文土器13、土器片石片10箱

#### 2. 遺跡の位置と環境

広畠遺跡は岡谷市川岸上四丁目付近に位置する。標高は約858m、三沢区の北側にあたり、主要地方道下諏訪・辰野線から山側へ800mの位置にある。

この遺跡のある高尾山麓一帯は、天竜川に向かって全長1kmもの丘陵が幾つも並走する洪積台地を形成している。本跡はその中央部を占める鶴峯丘陵上に立地している。遺跡は北側に標高約1,013mの高尾山がそびえ北風を防ぎ、南側に開けた緩やかな丘陵で一日中日の当たる見晴らしのよい所である。また、湧水は年間を通して豊富な流量を誇り、沢が東側を流れている。今回の調査箇所は高尾山に極めて近く、山から丘陵へと変化し始める遺跡の北限に近いところである。

現在、遺跡は南端から次第に宅地化が進み、近年調査件数が増えてきているが、付近にはカモシカが出没することがあり、多くの自然環境が残されている。

広畠は豊富な遺物を出土するところとして早くから注目を浴びてきた遺跡である。「諏訪史一」には大正13年に横内秋太郎・小松九一氏らが行った発掘成果が記載されている。昭和4年に伏見宮博英殿下が発掘を行い、昭和21年には諏訪考古学研究所が、また同26年には川岸村誌編集事業の一環として調査が行われている。近年の調査は昭和62・63・平成2年に住宅建設に伴う発掘調査が行われ、試掘調査も行われている。

#### 3. 調査の経過

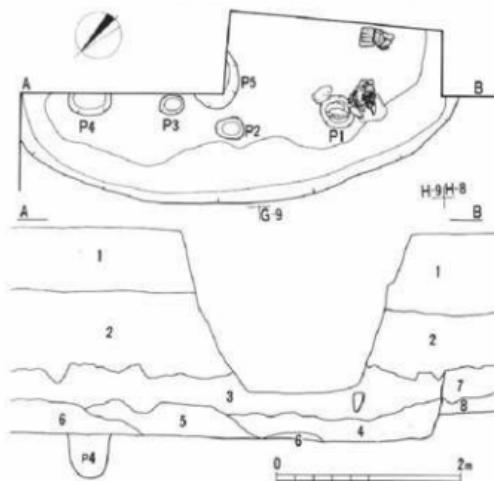
平成2年に一度発掘調査が行われた用地であるが、用地境は当時簡易な石垣で構築されていたため、崩壊を恐れ石垣の裏側まで調査を行うこ



第3図 10号住居跡 遺構検出状態



第4図 10号住居跡 覆土堆積状態



第5図 10号住居跡平面図 (1:60)

とができない箇所である。

調査は平成2年に行われた発掘調査に合わせてグリッドを復原し設定した。従って調査グリッドはG-H-8~10とI-9グリッド17.8m<sup>2</sup>に及んだ。土層堆積は盛土が行われているため、この盛土と耕作土と思われる第1・2層を掘り抜いた褐色土層から遺物が多く出土し始め、黒色土層の中に半円形状に遺構が発見され、第10号住居跡となった。

#### 4. 遺構と遺物

##### 住居跡

###### 第10号住居跡

###### (1) 調査の経過

擁壁工事の時点で住居跡の床面が確認されていたため、地図などから位置を計測し平成2年度調査のグリッドを復原した。H-8・9・10の調査をすすめると、盛土・耕作土を取り除いたあとから褐色土層から遺物が、集中的に出土し始め、黒色土層において遺構検出を行い褐色土の半円形曲線が発見され住居跡となった。

さらに遺構の形状から現在の調査区のままでは炉址の調査は不可能であると判断し、更にH-9・10グリッドの一部を擁壁の限界まで南側に拡張し炉址の位置を探査した。しかし炉址は発見されず、焼土すら出土しなかった。おそらく更に東側へ寄った所にあると思われたが、崩落の危険があるためこれ以上の拡張は行わなかった。覆土土層観察は調査区に合わせて住居跡の長軸でを行い、また地形の傾斜に沿ってセクションベルトを設定し土層堆積状態を観察しながら床面まで掘り進めた。

###### (2) 遺構（第5図）

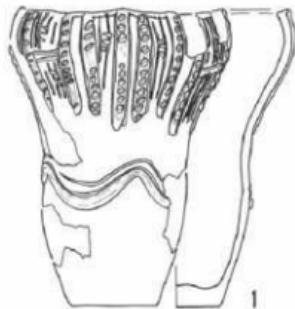
10号住居跡は北東～南西の方向に主軸をもつと思われ、推定長軸5mの楕円形の住居跡であると考えられる。住居跡の南半分は擁壁工事以前の古い時代に烟の開墾によってすでに破壊されている。壁の掘り込みは遺構検出面から28cmの深さであるが、セクション観察では検出面より高い土層からの掘り込みがあり、70cm以上の深さであることが判った。周溝は発見されなかつた。床面はローム層を掘り込んでいないため、やや堅壁が軟弱であるが、住居跡の内側になるほど黒色土の叩き面が明瞭となる。柱穴は4本発見されたが主柱穴と思われるものはP1・P4の2本で、深さは床面34・49cmである。

###### (3) 遺物（第7図）

覆土の堆積状態は覆土上層・下層と大別した

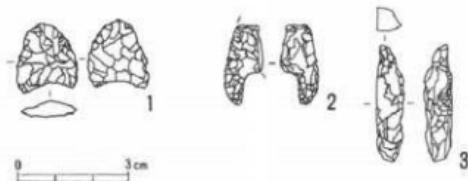


第6図 10号住居跡 遺物出土状態



遺物No./23.9H9.36.10Hフ上  
時 期/縄文中期中葉  
高 さ/21.5cm  
口 径/14.9cm  
胎 土/褐色 砂粒子多く含む 族良好  
整 形 内/横方向にミガキ炭化物付着  
外/横方向にナデ底部アジロ感  
文 標/口縁より棒状工具圧痕のある陳香と沈継が施下

第7図 10号住居跡 出土土器実測図 (1:4)



第8図 10号住居跡 出土石器実測図 (1:1.5)

No	分類	種分類	石材	造構	層位	グリッド	遺物No	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
1	石斧	黒曜石	10H	フ上	H9	9	18.0	16.0	3.5	0.8		
2	石斧	黒曜石	10H	フ上	H10	5	(26.0)	(9.5)	5.0	0.8		
3	石錐	黒曜石		コウ	H9	32	31.5	9.0	7.5	2.1		
4	打製石斧	I	砂岩	10H	フ上	H9	5	105.5	48.0	17.5	94.7	
5	打製石斧	IV	泥岩	10H	フ下	H9	18	112.0	54.0	12.0	83.6	
6	打製石斧	I	泥岩	10H	フ下	H9	21	91.0	36.0	9.0	38.8	
7	打製石斧	I	緑色片岩	10H	フ上	H10	4	(96.0)	50.0	19.5	(102.4)	
8	打製石斧	V	頁岩	10H	フ下	H10	17	(67.4)	(57.0)	(13.5)	(68.9)	
9	打製石斧	VI	泥岩	10H	フ上	H9	7	(43.0)	(38.0)	(13.0)	(26.0)	
10	磨石類	安山岩	10H	フ下	H9	13	95.5	86.0	33.5	236.6		
11	磨石類	安山岩	10H	フ下	H9	17	113.0	77.0	27.0	300.2		
12	磨石類	安山岩	10H	フ下	H11	1	43.5	61.0	6.0	17.0		
13	磨石類	安山岩	10H	フ下	H9	16	88.0	62.0	19.0	155.3		
14	磨石類	安山岩	10H	フ下	H9	22	51.5	41.5	10.5	27.2		
15	磨石類	安山岩	10H	フ下	H10	7	104.0	71.5	50.0	335.7		
16	鐵石	チャート	10H	フ上	H10	6	48.5	38.0	30.0	76.6		
17	鐵石	安山岩	10H	フ	I9	1	127.0	93.0	43.5	576.6		
18	鐵石	粘板岩	10H	フ下	H9	19	89.0	29.0	16.0	56.0		
19	鐵石	チャート	10H	P1	H9	26	66.5	46.0	37.0	158.9		

第8・11図 石器観察表



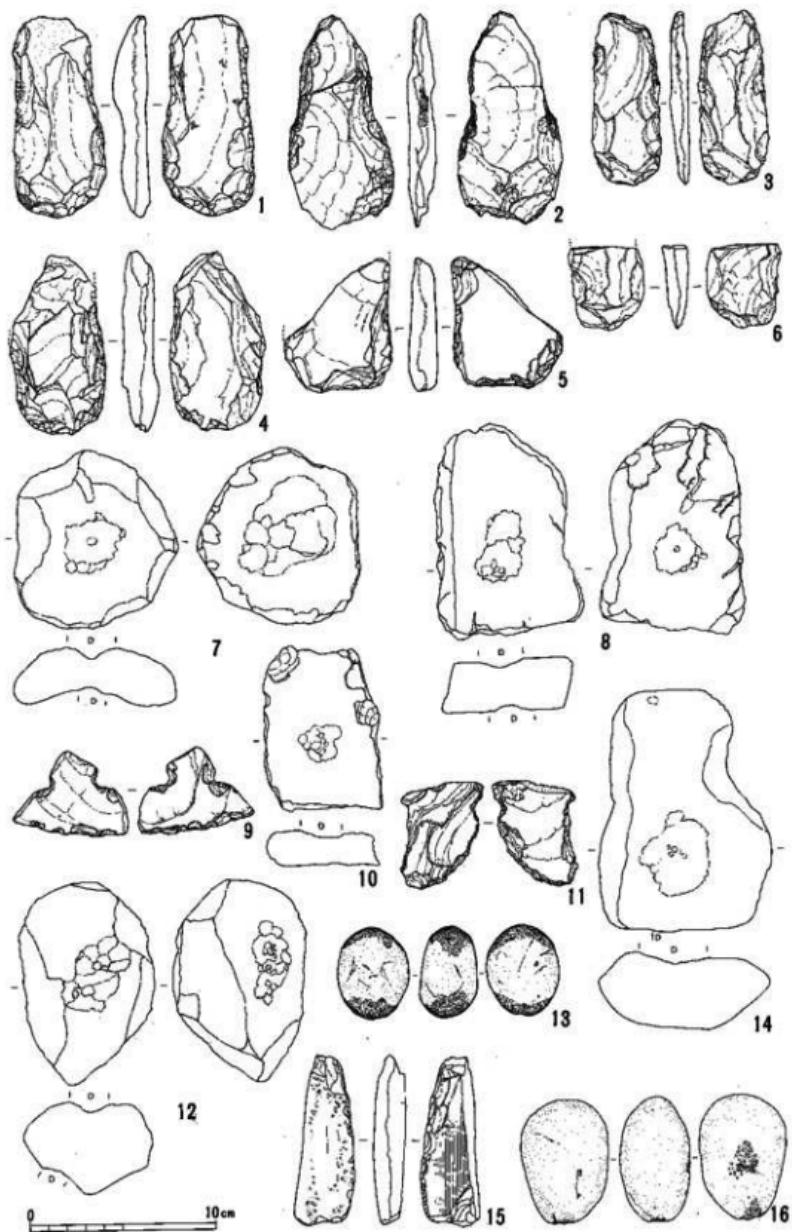
第9図 打製石斧



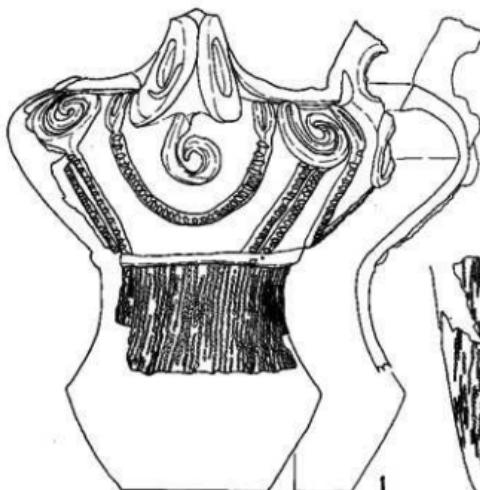
第10図 石鏃・石錐・石鎚

が、4層に細分される。覆土上層とした第3層褐色土層からは土器片、石片のほか、石鏃2、石錐1、石匙1、凹石3、打製石斧5、敲き石2が出土し、復原可能な土器が6個体出土した。このうちほぼ完形に復原された土器（第13図1）は住居跡床面より30cm上がった位置から逆位で出土した。

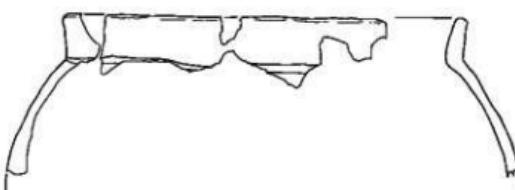
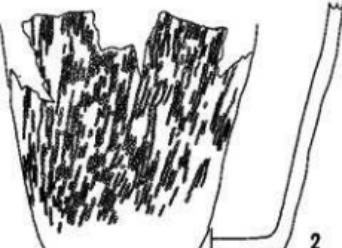
覆土下層とした第4層黒褐色土層、第5・6層暗褐色土層から土器片・石片、石匙1、打製石斧3、磨製石斧1、凹石2が出土し、復原可能な土器が2個体出土した。第4層暗褐色土層からも復原可能な土器が出土した。ただし、覆土上層、下層と便宜上分けたが、下層とした第4層が堆積する時には既に第5・6層がかなりの厚さに堆積している。セクションを観察すると、住居跡が廃棄された後傾斜の高い方から急速に埋没が始まった様子が観察される。このため、覆土下層の遺物が必ずしも住居跡において使用されていた土器であるとは言えない。また、第3層の出土遺物については、住居跡が埋没し始めた頃にいくらかの使用不可能な土器等を捨てた廃棄物ではないかと考えられる。



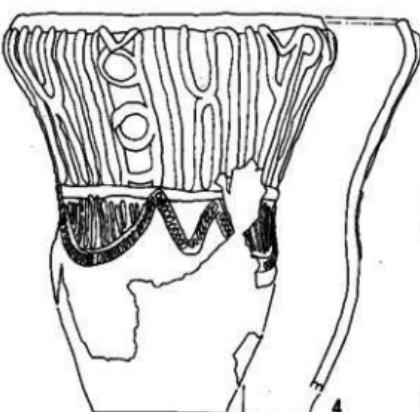
第11図 10号住居跡 出土石器尖端圖 (1 : 3)



遺物No./23.9I9.4.10Hフ  
時 期/縄文中期中葉  
高さ/ (26.0cm)  
口 � 径/18cm  
胎 土/赤褐色 粗い砂粒子を含む 燃成良好  
整 形 内/黒褐色で横方向にヘラで溝製  
外/褐色で器面は横方向にナデ調製  
文様/口縁には4カ所に環状の把手がつけられ、把手の下及び間には隆帯による溝巻文と下垂する陰帯文で区別される。隆帯上面は刻目文がつけられる。肩部以下には縱走する燃系文が施文される。



遺物No./23.9I9.3.10Hフ  
時 期/縄文中期中葉  
高さ/ (17.5cm)  
胎 土/褐色 細粒子を含む 燃成良好  
整 形 内/横方向にナデ  
外/横方向にナデ  
文様/全面に斜繩文



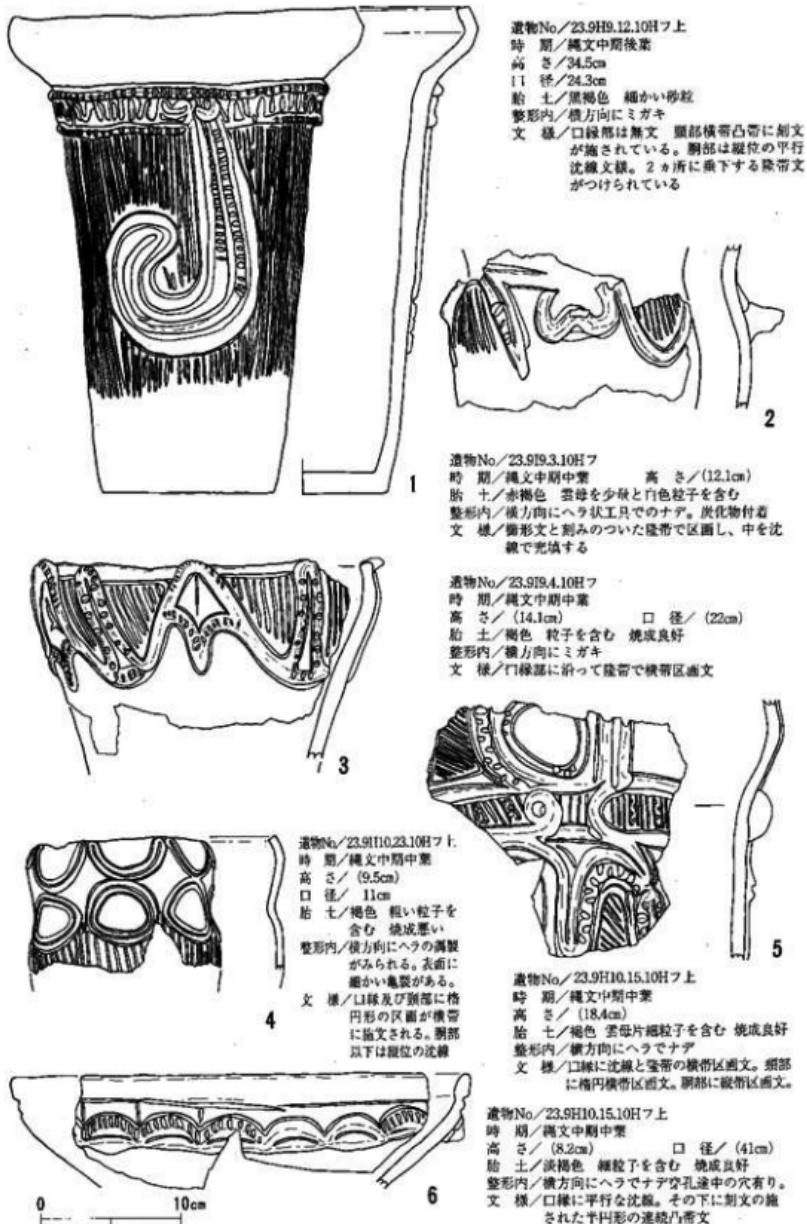
遺物No./23.9I9.3.10Hフ  
時 期/縄文中期中葉  
高さ/ (11.4cm)  
口 径/ (24.0cm)  
胎 土/褐色 霧母を含む 燃成良好  
整 形 内/横方向にヘラでミガキ  
外/横方向にヘラでナデ 灰化物付着  
文様/なし



遺物No./23.9I10.23.10Hフド  
時 期/縄文中期中葉  
口 径/13.0cm  
胎 土/褐色 砂多く含む ややもろい

0 10cm

第12図 10号住居跡 出土土器実測図 (1:4)



第13図 10号住居跡 出土土器実測図 (1:4)

#### 4. 阿原神田遺跡

##### 1. 調査の概要

発掘調査の地点 岡谷市南宮一丁目9757-20外

発掘調査の期間 平成6年4月15日～5月10日

調査の目的・原因 住宅建設

土地の所有者 高林 昭宏氏

発掘調査面積 47.2m<sup>2</sup>

発見された遺構 遺物集中箇所

出土した遺物 弥生時代中期前葉土器片2箱、凹

石5、不定型石器12、石鏃2、磨製石斧1、石製円盤

1、スクレイパー1

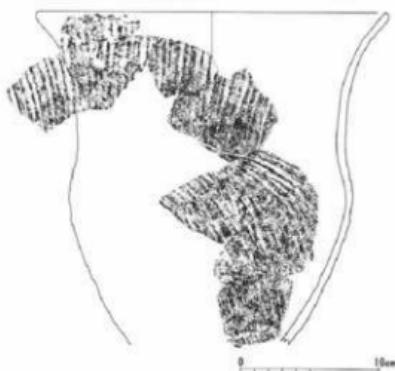
##### 2. 遺跡の位置と環境

阿原神田遺跡は、岡谷市南宮一丁目付近の比較的狭い範囲に遺物が採集される遺跡で、標高770m付近に位置する。この辺りは横河川扇状地の末端に近く、伏流水が湧水となって流れ出る地形であるため、このほかに清水池遺跡、神坐遺跡、清水権現遺跡などがあるが、いずれも大規模な集落ではない。

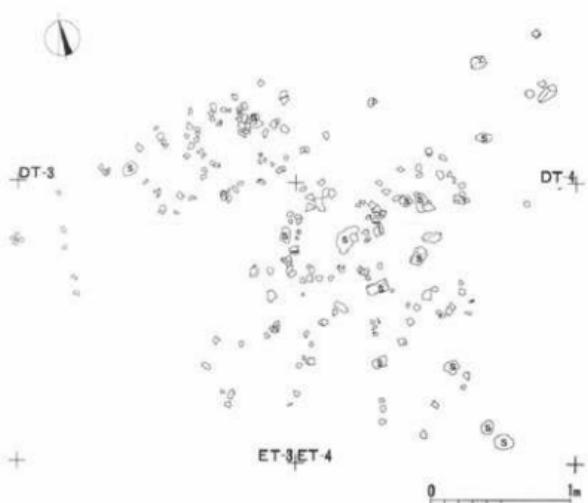
本遺跡を含め周辺遺跡に関する調査は八幡一郎氏らにより表面採集が行われ、大正7年に有柄石鏃、薄手の土器片、小型土錐などが採集されている。これらの採集遺物は縄文時代晚期ころの遺物ではないかと思われてきたが、今回の調査によりこれまで以上の豊富な資料を得ることができた。



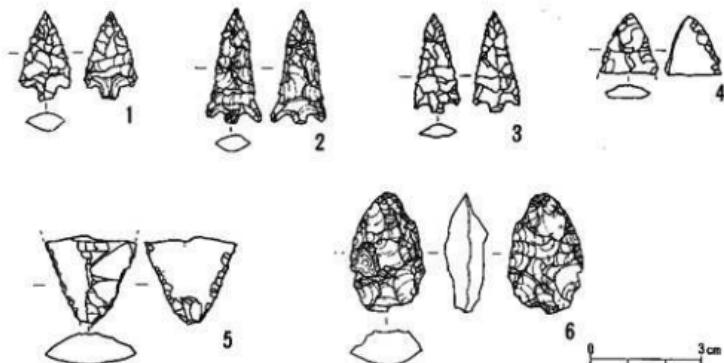
第14図 黒色土層遺物出土状態



第15図 黒色土層出土土器拓本 (1:4)



第16図 黒色土層遺物出土状態 (1:40)



No	分類	細分類	石材	遺様	層位	グリッド	遺物No	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
1	石器		黒曜石	クロ	ET4	62	24.0	13.5	5.0	1.2		
2	石器		黒曜石	表探		1	30.5	14.5	4.5	1.4		
3	石器		黒曜石	灰色粘土	DT3	37	26.5	16.0	3.5	0.8		
4	石器		黒曜石	クロ	DT3	4	(15.5)	14.0	3.0	0.6		
5	不定形石器		黒曜石	灰色粘土	ET3	40	23.0	24.0	7.5	3.0		
6	スクレイバー		黒曜石	コウ	DT3	1	31.5	19.5	9.5	5.4		

第17図 包含層出土石器実測図 (1:1.5)

### 3. 調査の経過

これまで畑として使用されていた土地だが、調査地での表面採集ではほとんど遺物が拾えない状態である。数箇所に設定した試掘坑の土層観察を行うと地下50cmに田んぼのトコ土があり以前は水田であったため、地下に埋没している遺物が地表に露出しにくい状態であることが判った。試掘坑により多少の違いがあるが、土器片が集中して発見された箇所の標準的な土層堆積状態は耕作土、トコ土の下に灰褐色土層(細かい砂の層)、黒色土で砂を多く含む層があり、横河川の氾濫によるものか、地下伏流水の湧き出しによる砂の水性堆積した砂層ではないかと推察される。その下には遺物を多量に含む黒色土層と灰色粘土層があり、弥生時代の遺物包含層と考えられる。

### 4. 遺構と遺物

#### 遺物集中ブロック

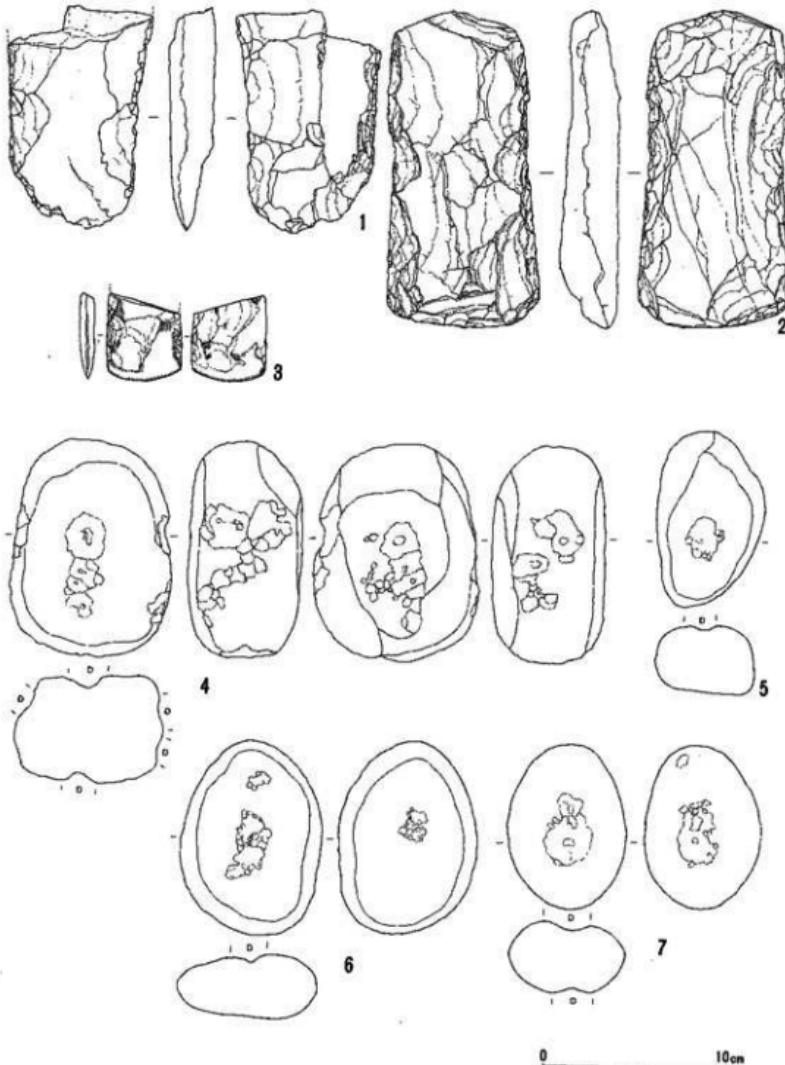
##### (1) 調査の経過

調査地には地形に合わせて任意にグリッドを設定し、9箇所の調査を行った。土器片がブロック的に集中して発見されたのはDT-E T-2・3・4付近の限定された範囲である。他の試掘坑はどの土層からも遺物の出土は極めて少なく、遺物はこの場所に意図的に集中しており、弥生人の生活の痕跡を発見できた。

E T-4では耕作土、灰褐色土層、砂を多く含む黒色土層を掘り抜くと、真っ黒な土層になり遺物を多く出土するようになる。この集中した遺物の範囲がどこまで広がるか、また住居跡などの遺構になるのかを確認するため、周囲を拡張しDT-E T-2・3・4を調査した。遺物が出土する黒色土層は水分を多く含んでおり、ベタベタした状態の土層である。また、調査中にはあちこちの試掘坑から暗渠排水がこの黒色土層を掘り抜くように作られているのが確認されており、元来、非常に湿地帯であったことが窺われる。

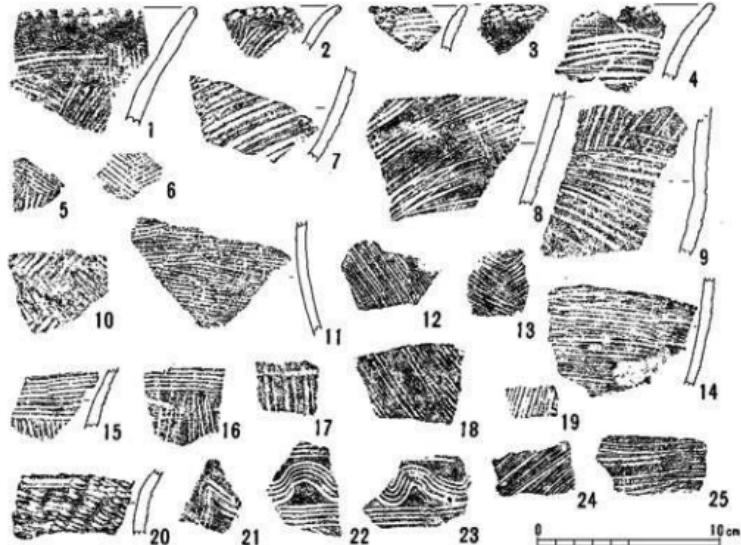
##### (2) 遺物の出土状態(第16図)

遺物は直径10~15cmの礫とともに混在して出土した。土器片に関しては完形品がつぶれたよう



No	分類	細分類	石材	遺構	層位	グリッド	遺物No	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
1	石器	I	砂岩	クロ	ET4	74	(116.5)	75.0	25.7	221.3		
2	石器	I	砂岩	クロ	ET4	61	172.0	82.5	32.0	564.9		
3	磨製石斧		凝灰岩	クロ	GT5	1	(42.5)	40.0	7.0	23.5		
4	磨石頭		安山石	灰色粘土	ET2	6	118.0	89.0	59.5	841.0		
5	磨石頭		安山石	灰色粘土	ET4	77	95.5	59.0	40.0	266.3		
6	磨石頭		安山石	灰色粘土	ET2	7	14.0	84.5	36.0	384.0		
7	磨石頭		安山石	灰色粘土	ET3	39	89.0	64.5	43.5	300.8		

第16図 包含層出土石器実測図 (1 : 3)



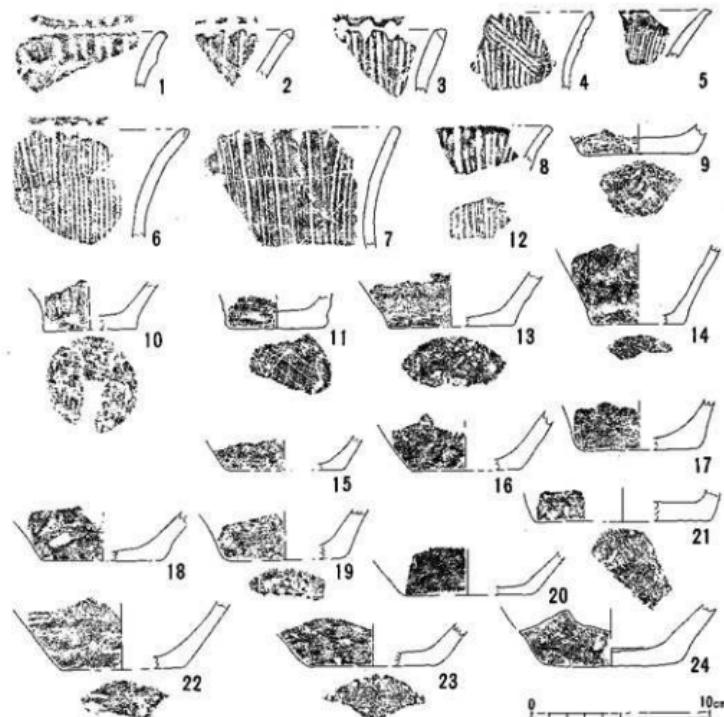
No.	グリッド・No.	層位	器形	部位	焼成	内面些形	色調	胎土	外表面文様・塗形	備考
1	E T3.6	クロ	壺	口縁	悪い	ミガキ	黒茶色	白色粒多量	深い横位羽状条痕	口唇外縫ヘラ押さえ
2	E T4.33	クロ	壺	口縁	悪い	ミガキ	褐色	白色粒多量	浅い条痕	口唇外縫ヘラ押さえ
3	E T4.28	クロ	壺	口縁	悪い	ミガキ	褐色	白色粒少	浅い条痕	口唇外縫3条新続比縫
4	D T4.8	クロ	壺	口縁	良い	ナデ	焦茶色	砂白色粒少量	深く粗い条縫	
5	E T3.38	灰粘	壺	口縫	良い	ミガキ	褐色	白色粒多量	浅い横位羽状条痕	
6	E T2.4	灰粘	壺	口縫	良い	ミガキ	褐色	白色粒多量	浅い横位羽状条痕	
7	D T3.38	灰粘	壺	口縫	良い	ミガキ	褐色	砂白色粒少	深く粗い条縫	
8	E T2.1	クロ	壺	口縫	良い	ミガキ	褐色	砂白色粒多量	浅く粗い条縫	外表面炭化物付着
9	E T4.57	クロ	壺	口縫	良い	ミガキ	褐色	砂白色粒少量	腹部上下で条痕の方向が変わる	
10	D T3.34	灰粘	壺	口縫	悪い	ミガキ	黒色	白色粒多量	浅い横位羽状条痕	もろい
11	E T3.4	クロ	壺	口縫	悪い	ミガキ	焦茶色	砂白色粒少量	浅く粗い条痕	もろい
12	E T4.78	灰粘	壺	口縫	良い	ミガキ	焦茶色	砂白色粒少量	浅い条痕	胎土内に炭化米
13	D T3.36	クロ	壺	口縫	良い	ミガキ	褐色	砂白色粒多量	浅く粗い条痕	
14		表探	壺	口縫	良い	ミガキ	褐色	白色粒少量	浅く粗い条痕	
15	D T4.7	クロ	壺	口縫	良い	ミガキ	褐色	白色粒多量	浅い横位羽状条痕	
16	E T3.36	灰粘	壺	口縫	不良	ミガキ	褐色	砂白色粒多量	浅い横位羽状条痕	
17	D T3.5	クロ	壺	口縫	良い	ミガキ	褐色	白色粒多量	浅い横位羽状条痕	
18	E T4.80	灰粘	壺	口縫	悪い	ミガキ	褐色	砂白色粒多量	浅く粗い条痕	もろい
19	E T2.1	クロ	壺	口縫	不良	ミガキ	焦茶色	白色粒少量	浅く粗い条痕	磨滅
20	D T3.11	クロ	壺	口縫	悪い	ミガキ	灰褐色	砂白色粒多量	断続的斜条痕	やや磨滅
21	E T2.1	クロ	壺	口縫	悪い	ミガキ	灰褐色	砂白色粒多量	波状の拂描文	磨滅
22	E T3.37	クロ	壺	口縫	良い	ミガキ	灰褐色	砂白色粒多量	波状、横位の拂描文	磨滅
23	E T3.31	クロ	壺	口縫	良い	ミガキ	灰褐色	砂白色粒多量	浅く粗い条痕	
24	E T3.38	灰粘	壺	口縫	良い	ミガキ	焦茶色	砂白色粒多量	浅く粗い条痕	
25	D T3.38	灰粘	壺	口縫	良い	ミガキ	焦茶色	砂白色粒少量	浅く粗い条痕	

第19図 包含層出土土器拓本（1:3）

な状態の纏まった土器の出土ではなく、壺や甕など複数の個体がバラバラの破片に散らばった状態で発見されたが、整理作業において幾つかの破片を接合することができた。黒色土層中の遺物を取り上げたあと、さらに下層の灰色粘土層からも遺物が統いて出土した。層位を分けて遺物の取り上げを行ったが遺構としての性格に違いは考えられない。

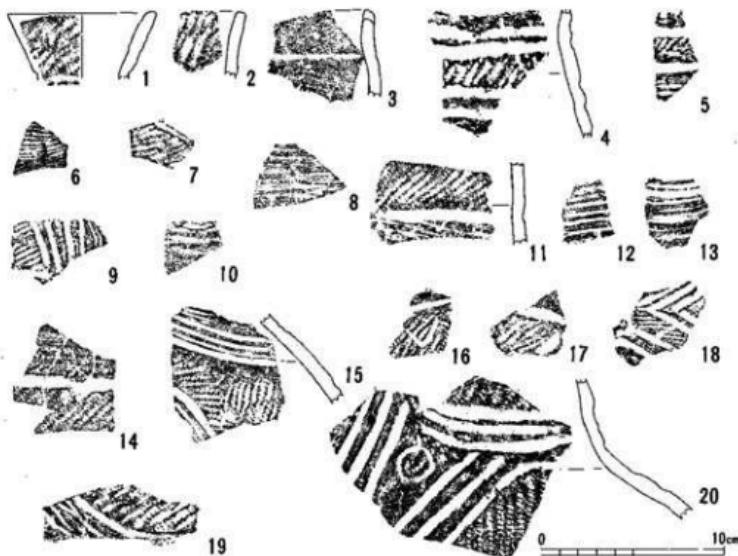
### (3)出土遺物（第15~22図）

出土した土器片は約1,100片になる。器種は壺と甕に分けられ口縫部、胴部、底部破片の文様の明瞭なものと小破片であるため器形を復原できる資料は乏しいが、破片を文様の特徴によりまとめた。



No.	グリッド・No.	層位	器形	部位	焼成	内面整形	色調	土	外御文様・菱形	備考
1	E T2.1	クロ	甌	口縁	悪い	不明	灰褐色	砂白色粒子多量	ヘラ状工具押え	T1唇部刺突
2	D T4.3	クロ	甌	口縁	悪い	ミガキ	灰褐色	砂白色粒子多量	覆位沈線口唇2本の竹管利突	
3	E T3.41	灰粘	甌	口縁	良い	ミガキ	焦茶色	砂白色粒子多量	継続位浅い条痕口唇ヘラ押え	
4	D T3.13	クロ	甌	口縁	悪い	ミガキ	焦茶色	砂白色粒子多量	継続位浅い条痕口唇ヘラ押え	
5	E T3.38	灰粘	口縫	口縫	悪い	ミガキ	褐色	砂白色粒子少量	継続位浅い条痕	
6	E T3.10	クロ	甌	口縁	悪い	ミガキ	黒色	砂白色粒子多量	継続位浅い条痕	
7	E T4.67	クロ	甌	口縫	悪い	ナデ	褐色	砂白色粒子少量	継続位浅い条痕	
8	D T4.1	クロ	甌	口縫	悪い	ナデ	灰褐色	白色粒子少量	継続位浅い条痕	
9	D T3.20	クロ		底	悪い	ミガキ	焦茶色	砂白色粒子多量	アジロ痕	外面炭化物付肩
10	E T4.32	クロ		底	悪い	不明	砂白色粒子多量	アジロ痕		
11	D T4.3	クロ		底	良いい	不明	黒色	砂粒子少量	木素痕	磨滅
12	E T2.1	クロ		底	良いい	ミガキ	灰褐色	砂白色粒子多量	継続位浅い条痕	磨滅
13	E T4.37	クロ		底	良いい	ミガキ	灰褐色	砂粒子少量	布目圧痕	外面炭化物付着
14	E T3.41	灰粘		底	良いい	不明	灰褐色	砂粒子少量	無文	磨滅
15	E T3.38	灰粘		底	良いい	ミガキ	灰褐色	砂粒子少量	無文	磨滅
16	D T4.15	灰粘		底	良いい	ミガキ	灰褐色	砂白色粒子少量	アジロ痕	磨滅
17	E T3.38	灰粘		底	良いい	不明	灰褐色	砂粒子少量	無文	磨滅
18	G T5.4	クロ		底	良いい	ミガキ	褐色	白・赤粒子少量	布目圧痕	磨滅
19	E T2.4	灰粘		底	良いい	ミガキ	赤褐色	砂白色粒子多量	無文	磨滅
20	E T3.38	灰粘		底	良いい	不明	褐色	白色粒子少量	無文、布目圧痕	磨滅
21	E T4.10	クロ		底	良いい	ミガキ	灰褐色	白色粒子少量	無文、布目圧痕	磨滅
22	D T3.13	クロ		底	良いい	ミガキ	褐色	白色粒子多量	無文	磨滅
23	E T4.75	灰粘		底	良いい	不明	褐色	白色粒子多量	布目圧痕	
24	E T3.8	クロ		底	良いい	ミガキ	褐色	白色粒子多量		

第20回 包含層出土土器拓本 (1 : 3)



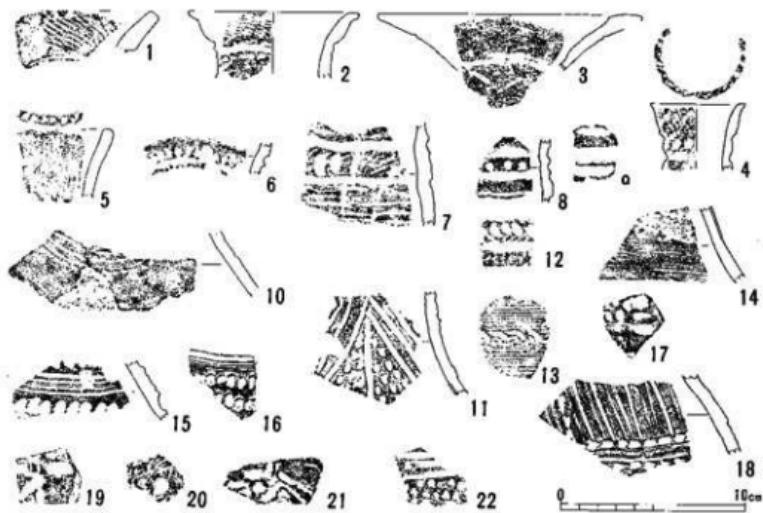
No.	グリッド・No	層位	器形	部位	焼成	内面整形	色調	胎土	外面文様・整形	備考
1	D T3.38	灰粘	壺	口縁	悪い	オサエ	褐色	砂赤色粒少量	縄文、沈線	やや磨滅
2	D T3.32	クロ	壺	口縁	悪い	ミガキ	褐色	砂白色粒極少量	縄文	やや磨滅
3	E T3.11	クロ	壺	口縁	悪い	不明	褐色	白色粒多量	沈線	もろい
4	D T3.38	灰粘	壺	腹	悪い	不明	褐色	砂少量雲母微量	縄文、沈線	磨滅
5	E T4.75	灰粘	壺	腹	良い	ミガキ	灰色	砂少量雲母微量	縄文、沈線	
6	E T2.4	灰粘	壺	腹	良い	ミガキ	褐色	白色粒多量	縄文	
7	E T2.1	クロ	壺	腹	悪い	不明	灰色	砂粒子少量	縄文、沈線	やや磨滅
8	D T3.19	クロ	壺	腹	悪い	ミガキ	褐色	砂少量雲母微量	浅い条痕	やや磨滅
9	E T3.38	灰粘	壺	肩	良い	ミガキ	灰色	砂少量雲母微量	縄文、沈線	
10	D T4.3	クロ	壺	腹	悪い	不明	褐色	砂少量白色粒少	浅い沈線	磨滅
11	D T3.19	クロ	壺	腹	良い	ミガキ	褐色	砂少量雲母微量	縄文、沈線	
12	D T4.3	クロ	壺	腹	悪い	不明	褐色	砂粒子少量	沈線、剥離	
13	D T4.15	灰粘	壺	腹	良い	ミガキ	褐色	砂少量雲母微量	沈線、浅い条線	
14	D T3.19	クロ	壺	肩	悪い	ミガキ	褐色	砂微量雲母微量	縄文、沈線	
15	E T4.75	灰粘	壺	肩	良い	ミガキ	褐色	砂少量	縄文、沈線	
16	E T3.38	灰粘	壺	肩	良い	ミガキ	黒色	白色粒雲母微量	縄文、沈線	
17	D T3.5	クロ	壺	肩	良い	ミガキ	灰色	白色粒雲母微量	縄文、沈線	
18	D T3.40	灰粘	壺	肩	良い	ミガキ	黒色	白・赤粒子少量	縄文、沈線	
19	E T4.75	灰粘	壺	肩	良い	ナデ	焦茶色	雲母微量	縄文、沈線	ボタン状貼付
20	D T3.38	灰粘	壺	肩	良い	不明	灰色	白色粒雲母少量	縄文、沈線	

第21図 包含層出土土器拓本 (1:3)

壺（第19～20図） 主な文様は条痕文系と横描文系（第19図21, 22, 23）に分けられる。条痕文系土器の中には縦位（第20図2～8, 12）横位（第19図11, 25）斜位（第19図7, 12, 18）縦・横羽状（第19図1, 5, 6, 10）が認められるが、部位による文様帶の違いまでは推察できない。

なお底部破片については壺・壺の器種判別はしないが、底面より直線的に開くもの（第20図15, 22）と僅ながら開きに段を持つもの（第20図10, 11, 13, 14, 18, 24）が認められ、器種別に分けられるのかもしれない。

壺（第21～22図） 口縁部の残る頭部破片については細頸壺（第21図1～3 第22図1, 2, 4, 5）と広口壺（第22図3）に分けられるが、これ以外の破片については肩部・胴部とした。文様構成は縄文と沈線が主体



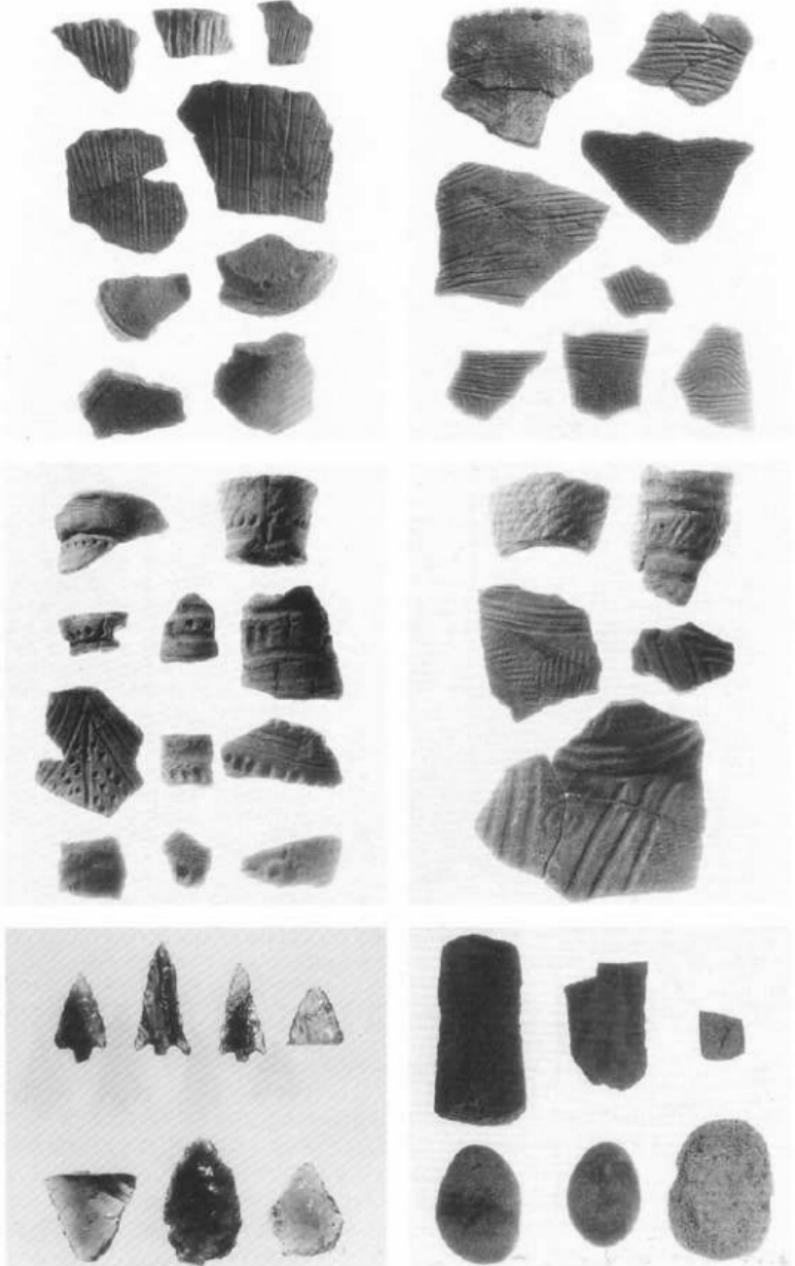
No.	グリッド-No	層位	器形	部位	焼成	内面整形	色調	胎土	外面文様・整形	備考
1	D T3.26	クロ 重	L1縁	良い	ミガキ	灰褐色	白色粒状物少量	織文、沈線	ややもろい	
2	E T3.38	灰粘 重	口縁	良い	ミガキ	灰褐色	白色粒状物微量	織文、沈線、刺突	ややもろい	
3	E T3.38	灰粘	口縁	悪い	不明	黒色	砂粒子多量	沈線(時計逆回り)	もろい	
4	E T4.34	クロ 重	口縁	悪い	ミガキ	灰褐色	白色粒子微量	織文、刺突、沈線	口唇刺突	
5	E T3.38	灰粘	口縁	悪い	ミガキ	灰褐色	白色粒状物微量	浅い縦位条痕刺突	口唇刺突	
6	E T4.39	クロ 重	頭	悪い	不明	灰褐色	白色粒子微量	沈線、刺突		
7	E T4.44	クロ	頭	良い	ミガキ	灰色	白色粒状物少量	沈線、刺突		
8	E T2.1	クロ 重	頭	悪い	ミガキ	灰褐色	白色粒子微量	沈線、刺突		
9	D T4.3	クロ 重	頭	悪い	ミガキ	灰褐色	白色粒子微量	沈線		
10	G T5.2	クロ	肩	悪い	不明	褐色	白・赤粒子少量	沈線、刺突	ややもろい	
11	D T3.7	クロ	頭	良い	ナデ	褐色	白色微粒子微量	沈線、刺突		
12	E T3.10	クロ 重	頭	悪い	ミガキ	灰褐色	砂白色粒子少量	沈線、刺突		
13	D T3.38	灰粘 重	頭	悪い	ミガキ	焦茶色	砂白色粒子少量	櫛接、刺突	もろい	
14	E T3.41	灰粘 重	頭	良い	不明	褐色	砂白色粒子少量	横位浅い条痕		
15	E T2.1	クロ 重	肩	良い	ミガキ	褐色	砂白色粒子少量	櫛接、刺突		
16	E T3.41	灰粘 重	肩	良い	ミガキ	焦茶色	砂白色粒子多量	横位条痕、刺突		
17	G T5.2	クロ 重	頭	悪い	不明	灰色	砂粒子少量	沈線、刺突	もろい	
18	E T3.34	灰粘 重	肩	良い	ミガキ	焦茶色	砂少量劣等物多量	浅い条痕、刺突		
19	D T4.15	灰粘 重	肩	良い	不明	焦茶色	砂白色粒子少量	沈線、ボタン状貼付	もろい	
20	E T3.15	クロ 重	肩	悪い	不明	灰色	白色微粒子少量	織紋、ボタン状貼付		
21	E T3.38	灰粘 重	肩	良い	ミガキ	灰色	砂白色粒子少量	沈線、竹管刺突		
22	D T3.38	灰粘 重	肩	良い	ミガキ	黑色	白色粒状物少量			

第22図 包含層出土土器拓本 (1:3)

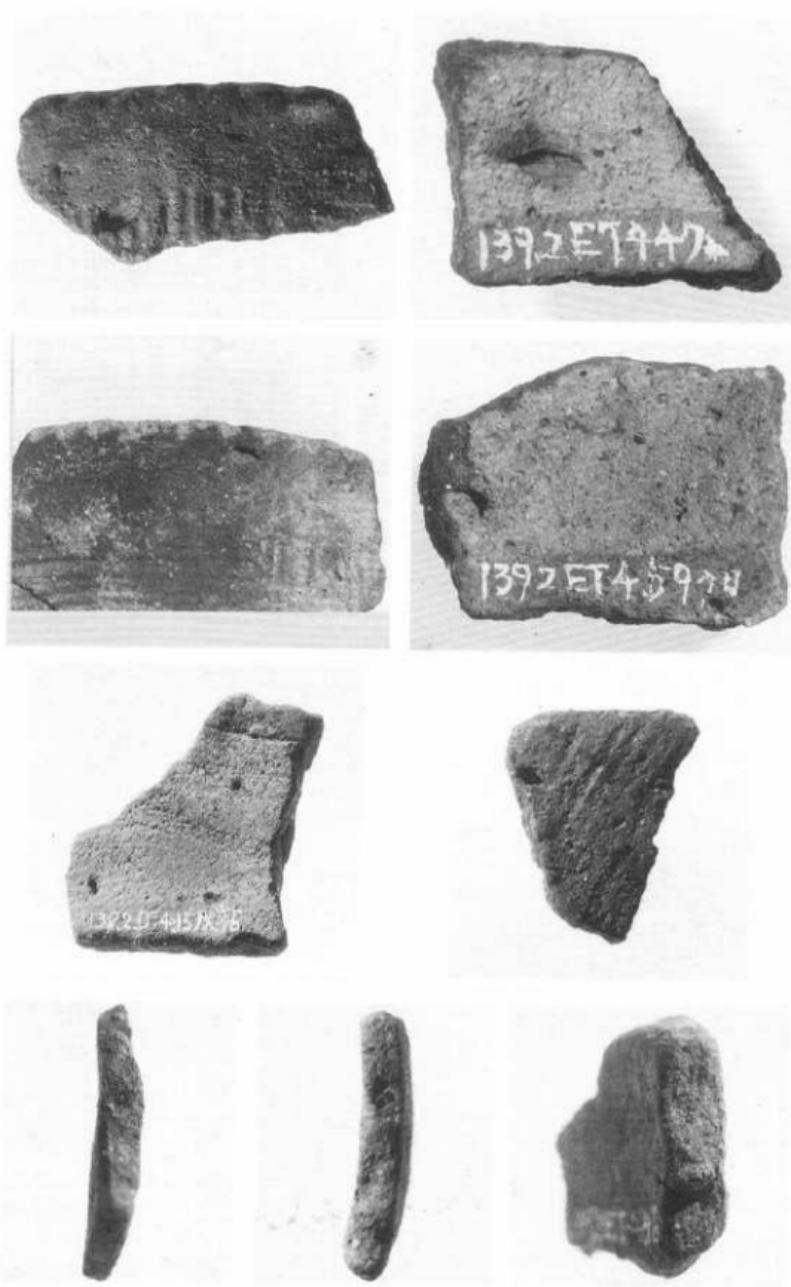
であるが(第21図)、更に刺突の加えられたもの(第22図)とに分けた。今回発見された土器片の中には粉圧痕のあるものが多く、また土器胎土の中に含まれた物が炭化して残ったと思われるものなどが発見された。

#### 石器(第17~18図)

土器片と同様、黒色土からの出土が多い。打製石斧は大型であり、鍬としての機能が考えられる。また石鎌は有柄のものが多く八幡一郎氏の採集された石鎌と一致するが、全体に細かな剥離を施した有柄石鎌と、片面、または全体に粗雑なやや厚みのある石鎌が出土している。



第23図 包含層出土遺物



第24圖 包含層出土土器 條壓痕

## 5. 間下丸山遺跡

### 1. 調査の概要

発掘調査の地点	岡谷市山下町一丁目 8-25
発掘調査の期間	平成6年6月27日～6年7月20日
調査の目的・原因	個人住宅地の取り壊しにより掘削のため
土地の所有者	武居清吉氏
発見された遺構	161m <sup>2</sup>
発見された遺構	縄文時代中期中葉住居跡3棟、同期小堅穴16基
出土した遺物	縄文時代中期中葉の復原完形土器6、石鏃5、打製石斧10、凹石9、石皿2、石錐2、磨製石斧1、砥石1、土器片、石片等10箱

### 2. 遺跡の立地と環境

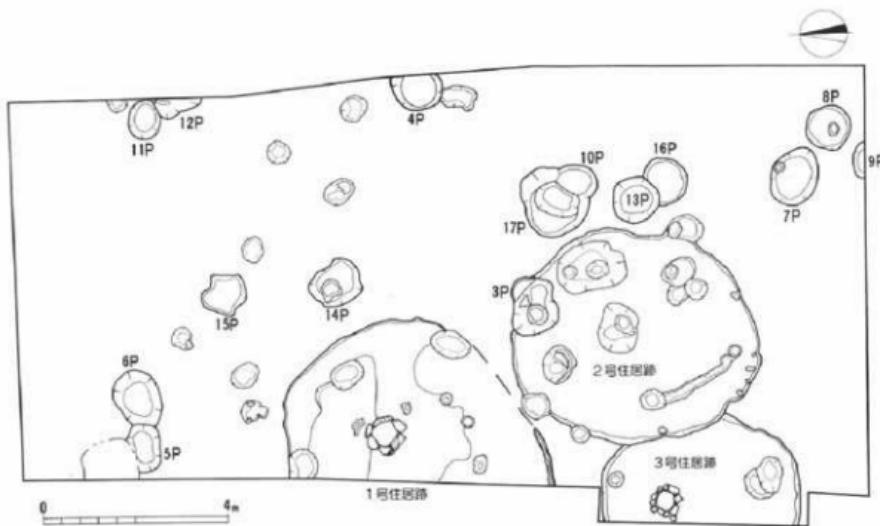
遺跡は間下丸山と呼ばれている小丘陵の東南にひろがる平坦地に位置する。この地は塚間川および横河川の氾濫原であり、このため幅300～500m、塚間川との比高5～10mの微高地は、塚間川段丘とも呼ばれている。この西側には平行して流れる大川があり、現在は天王森付近で流路を変えて塚間川に合流されているが、その昔は南下して岡谷駅の辺りから天竜川に流れ込んでいた。間下丸山のある段丘地形の先は諏訪湖底まで達し、その上には天王垣外、海戸、岡谷丸山の各遺跡が知られている。間下丸山付近では、過去に遺物の採集が行われ、縄文時代から奈良・平安時代までの遺物がひろわれている。発掘調査は今回がはじめてである。



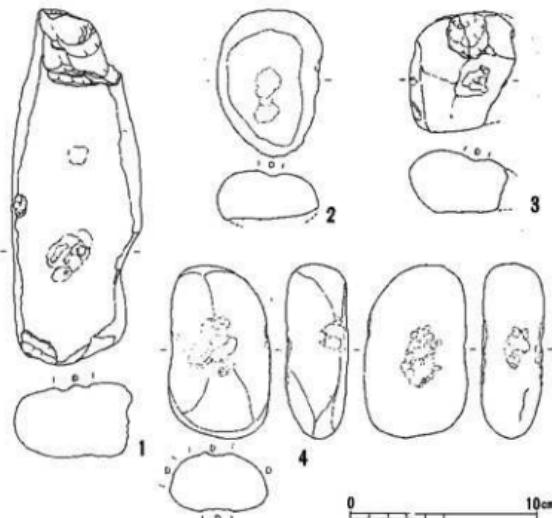
第25図 遺構検出状態



第26図 調査区全景



第27図 間下丸山遺跡遺構全体図 (1:120)



No	分類	細分類	石材	遺構	附位	グリッド	遺物No	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
1	磨石類	砂質変岩	1H	フド	V5	5	193.0	69.5	39.0	816.1		
2	磨石類	安山岩	1H	フ	U7	3	84.0	55.0	33.5	190.6		
3	磨石類	安山岩	1H	フ下	V6	10	73.5	(52.0)	35.5	157.4		
4	磨石類	安山岩	1H	フ	V7	3	93.0	54.0	32.0	239.5		

第28図 1号住居跡 出土石器実測図 (1 : 3)

### 3. 遺構と遺物

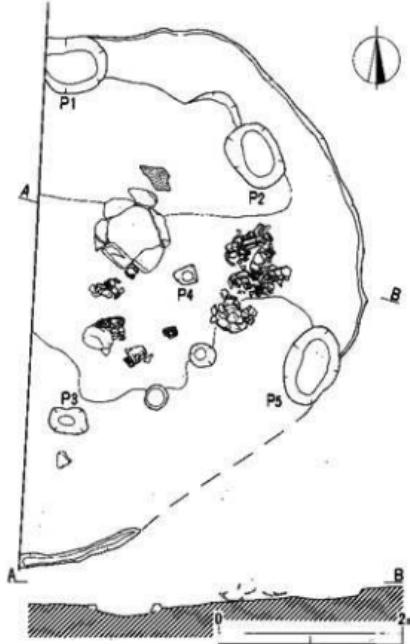
#### (1) 1号住居跡

1住は南北560cm、東西（推定）600cmのほぼ円形の竪穴住居跡である。北壁のローム層への掘り込みは15~20cmで、東壁に遡るにしたがい壁高は低くなり、南壁の掘り込みは殆ど見られない。ローム層は砂礫を含んでいるため崩れ易い。床は砂礫を含むローム層に褐色土を貼りつけてつくられ、床面は南に傾斜している。タタキの固い床面がところどころに散見された。

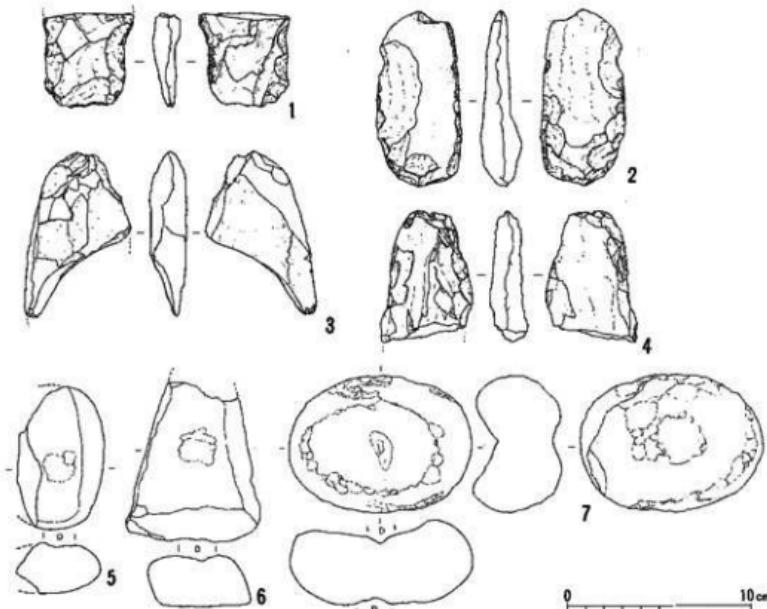
柱穴は5箇所が検出された。P1・P2・P5は梢円形でその長軸は壁に対して並行しており、底部に、2箇所の小ピットが見られた。

炉址は住居跡の中央やや北寄りに設けられ、大きさは南北60cm、東西52cmである。南側の配石2個は平らに置かれており焚口と考えられる。炉底には焼土は見られない。炉に北接して焼土化した床面が見られ、炉の西寄りの床面（U-6グリッド）に径50cmの円形に焼けた床面が見られた。

遺物は大部分が炉の東及び南寄りに集中している。床上10~20cmの覆土中から出土した完形の大型土器2点は、床面近くに1点は横につぶれた状態



第29図 1号住居跡 遺物出土状況 (1 : 60)



No	分類	細分類	石材	遺構	層位	グリッド	遺物No	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
1	打製石斧	泥岩	2H	P9	X8	3	(49.0)	47.0	13.5	34.1		
2	打製石斧	I 砂岩	2H	フ下	V9	26	94.0	44.0	19.0	82.0		
3	打製石斧	頁岩	2H	フ上	W9	9	(90.0)	53.0	19.0	77.6		
4	打製石斧	泥質片岩	2H	フ上	W9	7	(67.0)	45.5	17.0	61.1		
5	磨石類	安山岩	2H	フ上	X9	1	75.0	(46.0)	27.0	109.4		
6	磨石類	安山岩	2H	フ上	W7	4	85.5	73.5	39.0	265.9		
7	磨石類	砂岩	2H	フ上	W9	8	98.0	74.5	47.0	394.7		

第30図 2号住居跡 出土石器実測図 (1:3)

で、1点は大きく三つのかたまりに割れて出土した。このうちの1点の深鉢は2対の大小蛇体文把手の付く優品である。

石器は凹石4、横刃形石器1である。

#### (2) 2号住居跡

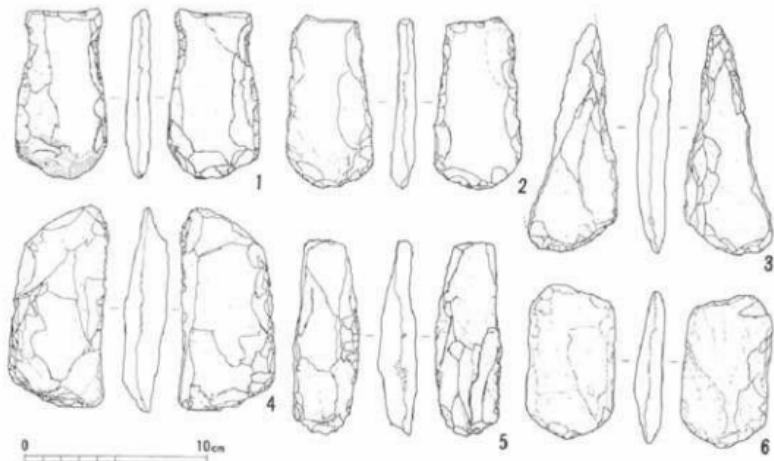
小窓穴の重複があるため、不整円形を呈する住居跡である。

全体的に遺物は少なかった。西半分には住居跡のものと思われる遺物が散見されただけで、まとまった遺物は見られなかった。

住居跡は東西460cm、南北500cmの窓穴で、北壁は褐色砂礫層を20cm、東壁は15cmの掘り込みが認められるが、南壁では掘り込みが浅く不明確である。西壁は3号住居跡の床面を15cm掘り下げている。壁面は褐色砂礫層のため崩れ易い。

床面は、西半分の1部には固い床面が見られるが、東半分は床面まで小窓穴と擾乱のため荒れている。柱穴はP1~P2、P4~P9までの8本が検出された。主柱穴はP2、P5、P6と思われる。P3は小窓穴である。

炉は検出できなかった。おそらくP3が掘られた時に破壊されたものであろう。P5から南に周溝とおもわれる溝を短い距離あるが検出した。西壁には壁の直下に小穴5箇所が等間隔に点在する。主な出土遺物は、西壁近くに底部1点が水平の状態で出土した。このほかには石錐1、石錐2、打製石斧4、凹石3、石皿1が出土している。



No	分類	細分類	石材	造様	層位	グリッド	遺物No	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
1	打製石斧	IV	砂質灰岩	3H	フ下	U9	10	90.0	49.0	12.0	88.7	
2	打製石斧	I	硬砂岩		アンカツ	V6	28	92.0	46.5	11.0	67.1	
3	打製石斧	I	泥質片岩		アンカツ	U11	1	123.5	(47.0)	15.5	87.8	
4	打製石斧	I	泥岩		アンカツ	W2	3	105.0	50.0	22.0	145.6	
5	打製石斧	I	頁岩	7P	フ	Y10	2	105.0	36.0	21.0	83.1	
6	打製石斧	I	泥質片岩		表採		10	82.0	47.0	15.0	72.1	

第31図 3号住居跡他出土石器実測図（1：3）

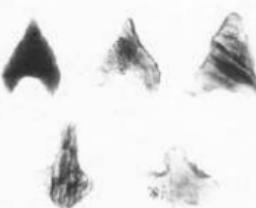
### (3) 3号住居跡

南北450cm東西推定400cmの円形住居跡である。西側の半分は調査区外のため発掘できなかった。壁は褐色砂疊層への掘り込みのために崩れが見られ、北壁では15cmの掘り込みであり、東壁は2号住居跡の西壁に切り込まれている。南壁は掘り込みが浅い。

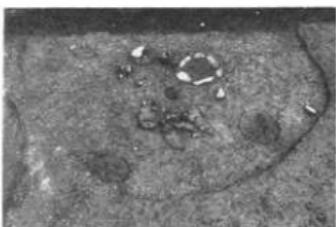
床面は水平で固く、柱穴は北壁にP1と南壁にP2・P3が隣り合って検出された。炉址は堅穴跡の中央やや北寄りに位置し、10個の偏平な石を配置して東西45cm、南北40cmの楕円形に作られている。深さは5cmと浅く、炉底に焼土は見られない。炉址の西半分をおおうように、1/4個体ほどの土器が横倒しとなつて出土した。立体的な大形把手をもつ立派な土器である。この他の出土遺物としては覆土中より打製石斧1、凹石1、砥石1が出土した。

### (4) 小堅穴

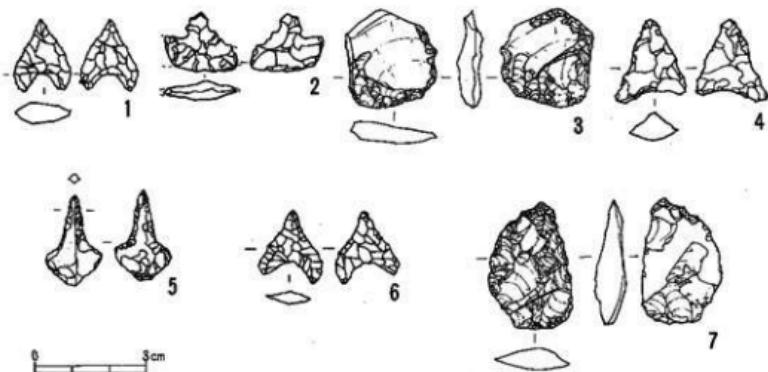
検出された小堅穴は17基である。1箇所2Pは精査の結果消滅した。以下別表による。



第32図 石鎌・石錐・石匙

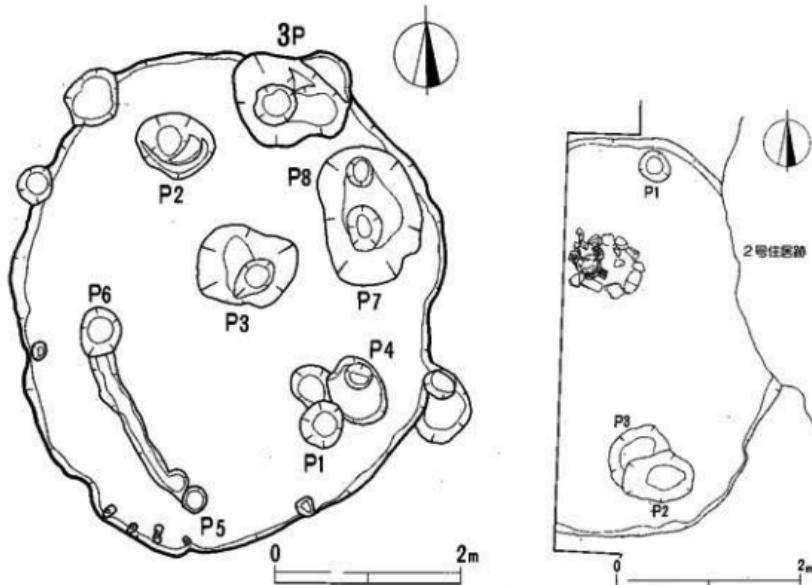


第33図 1号住居跡 遺物出土状態



No	分類	細分類	石材	遺標	層位	グリッド	遺物No	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
1	石器		黒耀石	1H	フ下	V6	9	19.0	15.5	4.0	0.9	
2	石器		黒耀石	1H	フ上	D6	11	20.5	15.0	4.5	0.9	
3	スクレイパー		チャート	1H	フ下	U6	5	26.0	24.0	6.5	3.9	
4	石器		黒耀石		アンカツ	A10	3	22.7	18.5	7.0	1.7	
5	石器		黒耀石	2H	フ下	W9	12	24.0	15.0	4.5	0.8	
6	石器		黒耀石	2II	フ上	V9	3	17.5	17.0	3.0	0.5	
7	スクレイパー		黒耀石	3H	フド	V10	3	33.5	21.0	7.0	4.4	

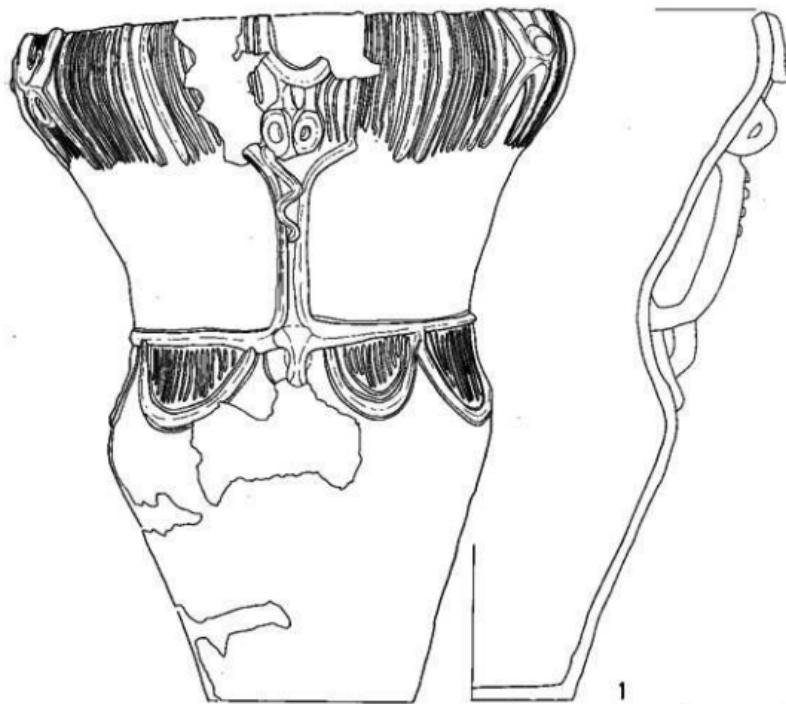
第34図 出土石器実測図 (1:1.5)



第35図 2号住居跡平面図 (1:60)

第36図 3号住居跡遺物出土状態 (1:60)





遺物No./83.1V6.15.1H

時 期/縄文中期中葉

高 さ/49.1cm

口 径/37.6cm

胎 土/褐色 粗い白色粒子を含む 焼成良好

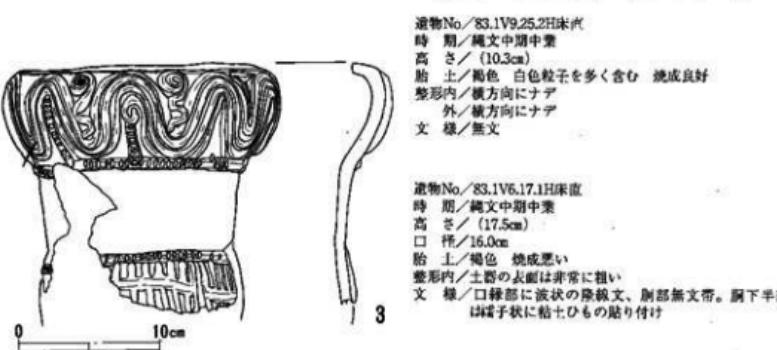
整 形 内/横方向へのナデ 腹部炭化物付着

文 様/口縁部にX字状壓痕が5カ所施文され、その間

は転走する沈線文と平行壓線で溝たされている。

1カ所に把手がついている。

1



遺物No./83.1V9.25.2H床直

時 期/縄文中期中葉

高 さ/ (10.3cm)

胎 土/褐色 白色粒子を多く含む 焼成良好

整 形 内/横方向にナデ

外/横方向にナデ

文 様/無文

2

遺物No./83.1V6.17.1H床直

時 期/縄文中期中葉

高 さ/ (17.5cm)

口 径/16.0cm

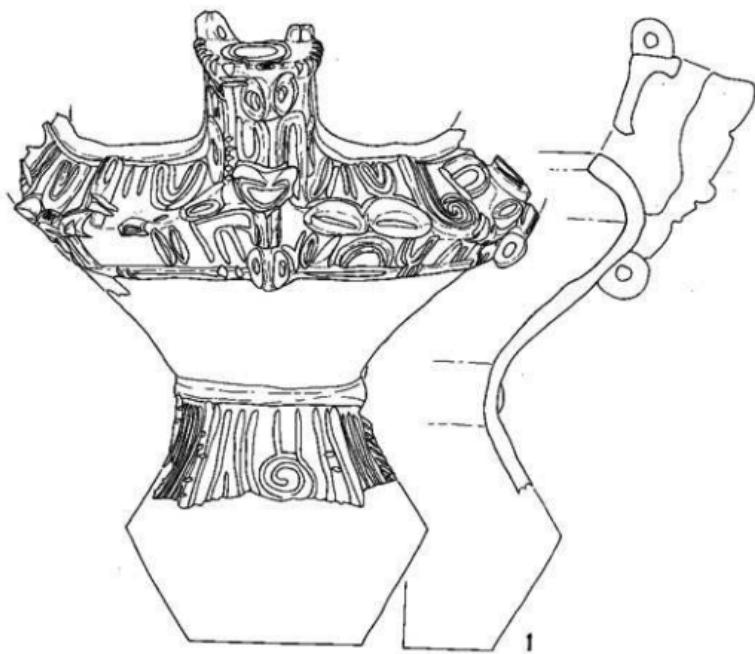
胎 土/褐色 焼成悪い

整 形 内/土器の表面は非常に粗い

文 様/口縁部に波状の壓紋文、腹部無文帯。腹下半部  
は縦子状に粘土ひもの貼り付け

3

第38図 1・2号住居跡 出土土器実測図 (1:4)



1

遺物No./83.IU9.11.3Hフド

時 期／縄文時代中期中葉

高 さ／(37cm) (45cm)

口 径／35.4cm

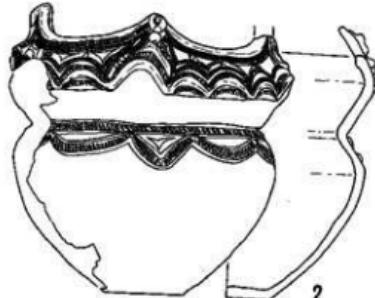
胎 土／暗褐色 粗い砂粒子を多く含む

整 形 内／胎土上噴いため表面はあれている。横方向へミガキ

外／黒褐色 縫接によつて4区画され口唇部は沈銀座帯を施す。胴部は

文 標／立体的な大把手のみ残存。文様帶は陰線によつて4区画され口唇部は沈銀座帯を施す。胴部は

縦線で区画された後斜めに施される。把手は鉢体を模様化している。



2

遺物No./83.IX8.1.10Pフ

時 期／縄文時代中期中葉

高 さ／20cm 18cm

口 径／15cm

胎 土／薄いが焼成良好。粗かい砂粒子を含む

整 形 内／暗褐色 橫方向にミガキ

外／暗褐色 胴部以下に灰の付着がある。ミガキ

文 標／口縁部は4つの波状突起で4区画される。横方

向に縦帶で区画された後斜めに施される。ミガキ

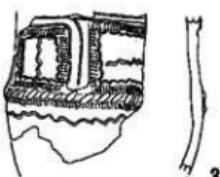
区画には一条の縦帶と複雑文が縦帶で施される。

区画内は無文。三叉文、刺突連続文、刻目文が多

用されている。

0

10 cm



3

遺物No./83.IV9.9.2Hフ下

時 期／縄文中期中葉

高 さ／(11.1cm)

胎 土／褐色 白色粒子少景含む

整 形 内／横方向へのミガキ

外／縦・横方向へのミガキ

文 標／沈銀とヘラ状工具による透続刺突で区画

底部降帶にヘラ状工具圧痕

第39図 2・3号住居跡小整穴出土土器実測図（1：4）



第40図 打製石斧



第41図 磨石類



第42図 1号住居跡 遺物出土状態



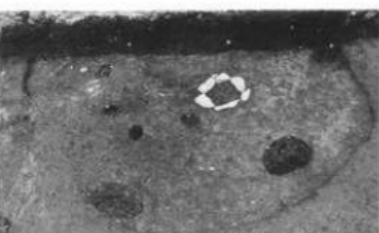
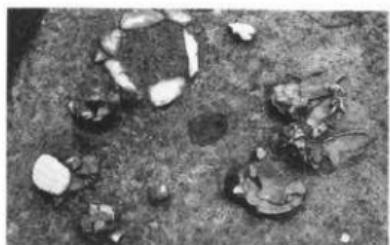
第43図 3号住居跡 遺物出土状態



第44図 1号住居跡 出土土器



第45図 3号住居跡 出土土器



第48図 1号住居跡



第46図 1号住居跡 遺物出土状態



第49図 2号住居跡



第47図 10P 遺物出土状態



第50図 3号住居跡

番号	位置	平面形	断面形	口径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	備考
1	V-4	楕円形	鉢形	64×50	40×30	33	壁の崩れあり 遺物なし
2	U-11	精査の結果消滅					
3	W-7	不整形	摺鉢形	160×94	26の円形	30	壁の崩れあり 2号跡と重複 遺物なし
4	Y-6	楕円形	桶形	110×100	74×80	45	壁は直、5ヶの自然石堆積あり 遺物なし
5	V-3	楕円形	鉢形	105×60	70×36	38	壁の崩れあり 遺物なし
6	V-3	楕円形	鉢形	120×105	72×56	27	壁の崩れあり 遺物なし
7	XY-10	楕円形	タライ形	130×100	94×68	20	底にピットあり 壁穴上面、打石斧
8	Y-10・11	円形	タライ形	100	96	24	底にピットあり 遺物なし
9	Y-11	楕円形	桶形	80×(60)	46×(40)	24	遺物なし
10	XY-8	楕円形	鉢形	90×70	76×55	30	17Pと重複 一括土器出土
11	Y-3	楕円形	桶形	90×68	60×48	30	壁の崩れあり 遺物なし
12	Y-3・4	不整形	摺鉢形	100×(68)	20×8	25	壁の崩れあり 遺物なし
13	X-8	円形	鉢形	100	68×60	45	壁の崩れあり 遺物なし
14	W-5	楕円形	鉢形	110×80	80×70	30	壁の崩れあり 底部にピット有 遺物なし
15	W-4	不整形	桶形	70×60	70×70	25	遺物なし
16	XY-9	不整形	鉢形	90	80	25	13Pと重複 遺物なし
17	XY-8	不整形	浅鉢形	150	60×35	35	壁の崩れあり 遺物なし

第2表 小窓穴一覧表

## 報告書抄録

ふりがな	ひろはた・あばらしんでん・ましたまるやまいせき はっくつちょうさほうこくしょ							
書名	広畠・阿原神田・間下丸山遺跡 発掘調査報告書							
副書名	平成6年度櫛垣外遺跡ほか発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	林 賢・小坂 英文							
編集機関	長野県岡谷市教育委員会							
所在地	〒394 長野県岡谷市幸町8-1 TEL 0266-23-4811							
発行年月日	1995年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
広畠	長野県岡谷市 川岸 三沢	20204	23	36度 2分 40秒	138度 1分 25秒	19940523～ 19940613	17.8	住宅建設
阿原神田	岡谷市堀ノ内 南宮	20204	139	36度 3分 51秒	138度 4分 3秒	19940415～ 19940510	43.2	住宅建設
間下丸山	岡谷市山下町	20204	83	36度 3分 44秒	138度 2分 53秒	19940627～ 19940725	161.0	駐車場敷地
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
広畠	集落	縄文	竪穴住居1棟		縄文土器5			
阿原神田		弥生	包含層		弥生土器片			
間下丸山	集落	縄文	竪穴住居3棟 小竪穴16基		縄文土器7			

